

第四十二回香川菊池寛賞受賞作品

縁切り供養

森 裕加里

有馬章吾は剣術の稽古を終えた後、井戸のところへ降りて行って、諸肌脱ぎになった。陽が傾いて風が出ていたが、梅雨の中休みに蒸された風は、汗の流れる肌に触れても生暖かかった。章吾はつるべで水をくんで、頭にかけて。さすがに井戸水は冷えていた。犬のように、ブルブルつと頭を振って水気を飛ばした。

次に盥に水を入れて、手拭を浸した。ゆるく絞って汗を拭いていると「今日も早いではないか」と背中（せなか）に声をかけられた。

反射的に振り向くと、同門の、板倉源八と岡内雄太郎が後ろに立っていた。

声をかけたのは板倉であろう。板倉は、大柄で肉づきのいい身体にふさわしい、太くてよく響く声をしている。岡内も背が高いが、こちらは瘦身で、板倉ほど張りのある声の持ち主ではない。手拭を使いながら「ああ」と章吾はそれぞれの顔に答えた。

「なんだかこのところ、稽古に身が入らなくてな」

章吾は、道場主が「今日の稽古はこれまで」と宣言して奥に入っても、居残って稽古を続けるのが常である。励めば励むほどに上達して、席次が上がってゆくのが楽しみだったし、また、十七歳という若さが、自ずと身体を動かすことを望んだ。

しかし、二歳違いの姉・由起の縁談が決まってからというもの、なるべく早く家路につくようになった。姉と過ごせる時間が残りわずかだと思いと、自然と心が家に向かう。

章吾と同一歳の岡内、一つ上の板倉も、居残り組の常連である。だから帰宅時間が早くなったのを気にかけて、こうして声をかけてきたのだろう、と章吾は思った。

「なにかあったのか？」

板倉が真面目な顔つきで訊いた。小柄で細身の章吾は、板倉に見下ろされる恰好である。

「いや別に……」

まさか「姉が嫁に行ってしまうのが寂しいのです」とは言えず、章吾は視線を外した。そんなことを口に出して、女々しいやつと思われるのが嫌だった。

しかし、岡内は見抜いていた。

「こやつ、由起殿の縁談が決まったあたりから、様子が変なんだ。寂しいのさ」
からかうように言う岡内に、

「そんなことはない」

と、章吾はむきになって言い返した。

瞬間、板倉が「ほう」と驚いた顔つきになり、それから厳粛な表情に変わった。

「いや、おまえの気持ちはわかる気がするぞ。俺のところは去年だったろう?」

章吾は板倉の姉が、昨年嫁したことを思い出した。板倉の兄弟構成は、兄、姉、そして板倉源八、妹、である。時々板倉は、兄弟の多いことに対する煩わしさを嘆き、姉と弟の二人だけ、という章吾の少ない兄弟構成を羨んでいた。

「おまえのところと違って、うちは喧嘩ばかりしていた。だから姉の縁組が整った時は、せいせいしたものだ。なのに、いざ居なくなられてしまうと、実に不思議なのだが、何か欠けてしまったようで、落ち着かない気分が続いた。うちでさえそうだったのだから、おまえが今から寂しくても当たり前だ」

板倉の飾らない本音を聞いて、章吾も恰好をつける気持ちも失せた。

「仲が良い」とは、子供の頃から誰からにも言われてきたことである。実際、章吾はいつも姉のそばに居た。由起はあまり自分から話す方ではなく、静かな性質である。何を言ってもここに、楽しそうに話を聞いてくれるから、由起のそばは居心地が良かった。

だから由起が外出する時は、章吾はたいてい同行したし、屋敷内にいる時も、由起の部屋で過ごすことが多い。由起は部屋にいる時、家族の着る物を縫っている。針を進める姉の傍らで、章吾はごろりと横になって、世間話をしたり、読書をしたりした。

どこの家でもそんなものだろうと思っていたら、余所はそうでもないらしかった。今、岡内が言ったように、歳が離れていない兄弟では「喧嘩ばかり……」と漏らす家が多い。

しかし章吾は、姉弟喧嘩というものをした記憶がなかった。

喧嘩をしようにもこの姉は、弟よりいつも一歩も二歩も引いていて、自ら身を小さくするから、喧嘩にならないのである。章吾がまだ幼くて腕白盛りだった頃、吹っ掛けたこともあったが、同じく幼かったはずなのに、それでも姉は、章吾の小さなこぶしを黙って受け止めるだけだった。

そんな、諍ったことのない姉が居なくなること、寂しいのはもちろんだが、他に章吾には、由起を心配する気持ちがあった。というのも、章吾は由起を頼りなく思っているからである。他家に嫁いでうまくやってゆけるかどうか、案じられてならないのだ。

例えば章吾は由起と外を歩く時、物乞いに遭わないことを願いながら歩かなければならない。なぜなら由起は物乞いを見ると、金を与えなくては気がすまないからである。

由起と章吾は、小遣いの蓄え、というものが持てない。小遣いは入用の時、母親の繁乃にその訳を言い、繁乃が承知したら初めて、入用な分だけを掌に載せてくれる仕組みになっている。そして姉弟で外出する時、繁乃は姉の由起に金を渡す。だから、由起が当初の目的外に金を使っ

まえば、章吾は目的を果せない。

由起のこの行為に、最初の頃、章吾は姉に猛抗議した。しかし、他のことでは決して抗わない由起が、このことだけは譲らなかつた。「やつらが働かないのは怠けだ」と章吾がつばを飛ばせば「病気なのかもしれない。だとすれば、働きたくても働けない」と由起は反論した。

確かに、体格や血色の良い物乞いというのはいなかった。一目で病を持つているのがわかつたし、生まれつき身体が不自由で、まともに歩けない者も少なくなかつた。だから、こう訴えられると、章吾は黙り込むしかなかつた。言い返す言葉が見つからない。

それでも悔しいから、母から渡された小遣いを、力づくで取り上げた。すると由起は、家に帰つてからもふさぎ込み、食事もまともにとれなかつた。乞食の姿が目には焼きついて離れないのか、心の痛みに苦しんでいる様子が、章吾から見えてわかつた。

この、姉のあまりの懊悩を目のあたりにしてからは、章吾はなんだか由起が可哀想になり、抵抗するのをあきらめた。そしてひたすら、物乞いに遭わないように……と願うようになったのである。しかし物乞いは、江戸の町に溢れていた。そして、遭遇の頻度が高くなればそれだけ所持金は少なくななり、そんな風にして結局、観劇やら買い物やらを取り止めたことが幾度もあつた。

章吾が考えるに由起は、世の中から打ち捨てられた者が存在する、ということ自体に、気持ち傷ついてしまうようである。そして由起は、そういった者達を見たくないばかりに、近頃では外出も控えるようになってしまった。

そんな姉だから、嫁ぎ先で侮られやしまいか、と章吾は心配してしまうのだ。

縁談の相手は、賄頭・武井善次郎の嫡男、寅之助である。奥祐筆組頭の有馬の家と比べたら、役高は有馬家の半分しかない。家禄となると、四分の一である。それでも二百石の旗本だから、まさか由起自らが食材を買いに毎日町へ行かなければならない、などということはないと思うが、それでも章吾は心配になる。

「どうだ？ 帰りに一杯やらぬか」

板倉が杯を干す仕草をして見せた。岡内もうなづいている。

三人は月に一度、道場の隣り町・神田佐久間町にある「だるま屋」という居酒屋で飲むことにしている。その時は章吾は金を持って来ているが、今日はいきなりで持ち合わせがない。

章吾が思案していると、見透かしたように板倉が、

「金なら心配するな。おごつてやるぞ」

それに間髪入れず岡内が、

「由起殿の祝いだ」

と続けた。どうやら板倉と岡内は、二人で示し合せていたようである。

ならばその気持ちに応えて馳走になろう、と章吾は思った。

「だるま屋に行くのではないのか？」

店と反対方向へ歩き始めた板倉と岡内に、章吾は問いかけた。すると二人は、

「今日はもつと良い所へ連れて行ってやる」

と含み笑いで返す。章吾はわからないままに、黙ってついて行った。

大伝馬町を南に下って伊勢町堀に出る手前の連浄橋で、橋桁の補強普請をやっているのが見えた。普請場に近づくと岡内が言った。

「ちよつと待ってくれ。知り合いだ」

岡内は袴を両手で持ち上げると、ひよいひよいとガニ股で、河川敷に降りて行った。

そしてその中で立ち働いている大勢の男の内の一人のそばに寄り、少しばかり立ち話をすると、また章吾達の所に戻ってきた。

「人足に知り合いがいるのか？」

板倉が珍しそうに尋ねた。

「あの男は、隣家の給人の息子だ」

「ほう……。しかしああしていると、わからぬな」

板倉が感心したように呟いた。人足達が身にまとっているものは、禪一丁にねじり鉢巻、だけである。岡内が話しかけた男も同様で、おまけに鬘をすっぽりと手拭で覆っているから、士分であるとは、言われてみなければわからない。

「給人の息子がどうして、人足のまねなどしているのだ？」

章吾は不思議な思いで岡内に尋ねた。

「稼ぐために決まっているのではないか。あいつは五人も弟妹がいる。俺も、今度やってみようと思っている」

「人足をか？」

章吾は岡内に目をみはった。岡内にも弟が二人いるが、岡内の父は家人ではなく、れっきとした小普請方で、岡内雄太郎はその家の嫡男である。だから、なにも人足に身をやつすことなどないではないか、と章吾は思った。

「ああ。俺もちよつと入用だな。金は日払いだし、身元は聞かぬそうだ。あの橋は、町が金を出しているそうだ」

「道場はどこうするの？」

板倉が岡内に訊いた。

「少しの間休む」

「腕がなまるぞ」

板倉がおもしろそうに笑う。

「少しくらいどうってことない。それに、あれだけの重労働だ。鍛えられるぞ」腕組をし、胸を張る岡内に、章吾も板倉も黙った。板倉がなにを思ったのかはわからないが、章吾は岡内の話に軽く胸をくすぐられた。

章吾は来年、小姓組見習いに召し出されることが決まっているが、それまではこれまで同様、自分の金というものが持てない。これでは今日のように、突然誘われたりしたら困ることになる。板倉の家では毎月決まった額を渡してくれるそうだが、母の繁乃はそれには反対だった。そんなことをすれば、下品な買い食いをするかもしれない、と案じている。

ゆえに章吾の月一回の居酒屋代も、繁乃は本当は不承知なのだが、それでは付き合いができないだろう、と、父親の正伸がとりなしてくれたのである。居酒屋代を願い出て繁乃の洗面に会うたび、章吾は早く自分で稼げるようになりたいと思わないではいられない。

普請場が見えなくなる角を曲がるまで、人足達を、章吾は振り向き振り向きしていた。

やがて行く先に、白い手の女達が、行き交う男達の袖を引く、あやしげな店の並ぶ通りが見えてきた。そこが色町だと気づいた章吾は、通りの手前で足を止めた。止めたと知らない板倉と岡内の背中が、薄闇の中に溶けて行く。

「待て」

章吾が声をかけると、二人は振り返り、慌てて章吾の所へ引き返して来た。

「どうした？」

同時に尋ねた二人の声は小声である。

「女郎屋に行くのか？」

章吾もつられて声をひそめた。

「女郎屋ではないが、一膳飯屋だ。女が抱ける。喜べ」

張り切る板倉に、章吾は答えなかった。

「どうした。気が向かんのか？」

岡内が章吾の肩に手を置いた。

「俺は飲み屋なら行くが、女郎屋には行かぬ」

「なぜだ。おまえはまだ女を知らぬのだろうか？ 十七にもなって、それはまずい」

板倉が章吾をにらみつけるようにした。

「そういうことに歳が関係あるか。馬鹿らしい」

章吾は赤くなりながら、岡内の手を払い除けた。

「おまえ、女に興味がないのか？」

不思議な物を見るように、板倉が丸い目をした。章吾はますます赤くなった。

「興味がないわけではない。ただ俺は、そうなるには、惚れた女が良いのだ」
板倉の声が大きくなった。

「そんなこと、誰だつてそうだ。だが俺達武家は、惚れたつて、夫婦にはなれぬではないか。辛い思いをするだけだ」

章吾の声も通常に戻った。

「武井のような場合もある」

これを聞いて、板倉と岡内は黙り込んでしまった。

三人の間に、しばらくの沈黙が落ちた。

そばを、棒手振が通り過ぎて行く。竹箆の中には蕪が一つだけ売れ残っていた。

由起が嫁ぐ相手、武井寅之助は、有馬家へ茶の湯の稽古に通つて来ていた。母の繁乃が師匠をしており、武家の婦女子を集めて教えていたのだが、その中で男は寅之助一人だった。

寅之助から入門願いが出た時、それまで男の弟子を持ったことがなかった繁乃は断つたが、寅之助が両親共々、どうしても、と頭を下げて請うので、それほど熱意があるならば、と認めた。

それから寅之助は、雨の日も風の日も決して稽古を休まず、熱心に通つて来たが、そうして丸二年が過ぎた時「どうしても」がもう一度出た。どうしても由起を嫁に貰いたい、と言ったのである。

はなからそういう気持ちで入門したのか、と繁乃が問い質したところ、寅之助はそうと認め、土下座をして詫びた。

稽古がない日でも、手土産を持って有馬家に日参していた寅之助の姿を見て、寅之助の気持ちに、章吾は薄々気づいていた。しかし、役高と家禄が、有馬家の半分にも満たない武井の家には、由起は縁がないものと思ひ込んでいた。

幕府の機密にも関与する奥祐筆組頭と、お上の腹の心配だけしていれば良い賄頭とでは、家格も違う。励んでも気の毒なことだ、と遠目から眺めていたから、父の正伸が、寅之助に由起を許した、と聞いた時には、章吾はひどく驚いたものであった。

最初に言葉を発したのは板倉だった。

「武井もうまくやったものだ。着想、かつ、粘りの勝利、というところか……」

寅之助が有馬家に稽古に通っていることは、武家屋敷ばかりの建ち並ぶその界限でたちまち噂になり、それから男子の入門願いが押し寄せたが、稽古がみだりにぎわつくの心配した繁乃は、寅之助の後の男子は断り続けていた。

由起と寅之助の縁組が決まったことが知れ渡ると、男子の入門願いは少なくなった。そこで多くが、由起が目当てだったとわかった。板倉も岡内もその口である。

章吾は塾生や道場の門下生から、由起によく付け文などを頼まれたので、由起が彼らの耳目を

引いているらしいことを知っていたが、実の姉を美しいと言われてもよくわからなかった。しかし整った姉の横顔に思わず目がひきつけられることはあり、そんな美貌の姉を持っていることは、章吾の密かな自慢だった。

「それにしても、有馬様がよくお許しになったものだ。格下で下さるのであれば、俺も諦めずに働き掛けをするのであった。しかし、武井と同じ家禄とは言っても、御家人ではくれまいか」

板倉が自嘲気味に言った。

「武井と同じ？ 同じなもんか。お前には兄がいるではないか」

岡内が口を尖らせた。

「そういうおまえは八十石ではないか」

「でも跡取りだ」

二人の間の雲行きが怪しくなってきたので、章吾は割って入った。

「もうやめろ。すまなかった。一膳飯屋とやりに連れてってくれ」

「無理しなくていいぞ。お前の家の祝いだからな。お前が嫌なら祝いにならぬ」

岡内が喧嘩を引きずる口調で言った。

「いや、ぜひ連れて行ってくれ。どんな所か興味が出て来た。別に、女の相手をしなくても、酒を飲むだけでもいいんだろう？」

章吾はだんだんとまた声が小さくなった。

板倉と岡内は、通りのどん詰まりの店に入った。暖簾には「うきよ屋」とあった。

暖簾をくぐって章吾は、ずいぶんと暗いな、と思った。入ってすぐの所に上がり框があるのが見えなくて、先に草履を脱いでいる岡内とぶつかった。

岡内達の後について板の間に上がり、飲み食いしている先客達の間を通り抜けながら、奥の壁際に車座に座った。

座るとすぐに、若い男が膳を捧げて持ってきた。男が置いていったちろり、板倉と岡内のそれぞれから酌をもらった頃には、章吾は店内の暗さに目が慣れてきた。

その店は、いつも行くだるま屋とはだいぶ様子が違っていた。だるま屋では、土間で、狭い間口に飯台を並べ、長床机に腰掛けて飯を食った。五十がらみの親爺が板場に立ち、三十過ぎの男の雇い人が一人いるだけの、それだけの店だった。

ところがここは、広い板間のあちこちに客があぐらをかき、酌をする女がいる。女達の着物は地味だが、襟を大きく抜き、着崩している。斜め座りの裾が割れて、ふくらはぎが見えている女もいる。章吾はその白い足に、慌てて目を逸らした。見てはいけないものを見たような、罪悪めいた気分がわいた。

「おまえ達、ここへはちよくちよく来ているのか？」
 気分を紛らわすために章吾は問い掛けた。

「いや。この店には、俺も岡内も今日で二度目だ。だが馴染みの女が出来た」

板倉が飯を掻き込みながら言った。そういえば膳を持ってきた男が下がる時に、板倉は「おもんを頼む」とことづけていた。岡内は「おいせを」と言っていた。

章吾は壁を背に座っていたが、そこからは正面に、二階へ上がる階段が見えた。

一組の男女が手を取り合って二階へ上がって行く。

章吾はまた目を逸らした。生臭いものを見た思いがした。

やがて女が三人やってきて、嬌声を上げながら、おもんは板倉に、おいせは岡内にしなだれかかった。

章吾の脇に座った女は、おろくと名乗った。

女の息から酒の匂いがし、首筋から白粉のきつい匂いが立った。酌をする時、体がくつつく程に近寄られて、章吾は緊張した。思わず足を正座に直した。それを見ておもんが言った。

「まあ、こちらのお武家様、お行儀がよろしくていらっしやる。どちらの若様でらっしやいますの？」
 酔った板倉は、本名を含め、章吾の素性を安々と明かしてしまった。

しかし客を見渡したところ、侍らしいのは章吾達だけ、というこのような場所に働く女達が、役職やらそれに伴う家格やらがわかるとは章吾には思えなかった。

しかしおもんは、

「まあ、それでは大身のお旗本？」
 と手を叩いた。

「大身などではない（中堅どころだ）」と章吾は否定したが、おもんとおいせは、競って章吾の盃に酌をしようとした。が、二人とも板倉と岡内に引き戻され、章吾の脇にはおろくが残った。

「ねえ有馬様？」

おろくが、板倉とおもん、岡内とおいせ、にそれぞれ目を遣ってから囁いた。二組とも、章吾達から少し離れた所で酒を酌み交わし合っていた。

「なんだ？」

「ご両親様は、ご健在ですか？」

「ああ。健在だ」

「お姉様の、由起様もお元気ですか？」

章吾は驚いておろくの顔を見た。

「そなた、我らを存じておるのか？」

「はい。どうも、お久しゅうございます、と言っても、章吾様がお生まれになったばかりのことで

すから、お互いわからなかったのも当たり前なんですがね。私、それくらいの昔に、有馬様のお屋敷で、下働きをさせてもらったことがあるんですよ」

「なんと。これは奇遇だ。そなたの名前は、おろくと申したな？」

「こんなところ、本当の名前で出てる人なんていませんよ」

ろくという女は、いかにもねんねを扱う、といった感じでクスリと笑った。

「どんな木の股から生まれたかも知れない捨て子が、お旗本のご息女に納まって、ちゃんと二親わかって生まれた人間が、こうして酌取り女をやっているんですから、世の中わからないですよねえ」

「それは、どういうことだ？」

「あら、ぼつちゃん、ご存知でなかったんですか？ これはとんだご無礼を。どうぞ今言ったことはお忘れください」

「無礼だと？ ということは、我らのことを言っておるのか？ 一体、どういうことだ？」

旗本の息女とは、姉のことを申しておるのか？」

章吾の声が大きくなって、おろくが思わず前方の四人を見た。それに気がついた章吾も慌てて目を走らせた。

二組の男女はそれぞれ大声でしゃべり合っていて、章吾達の話が届くとは思えなかった。それでも章吾は、彼等から遮る形に、おろくの前に座り直した。

「あら、怖いお顔。でも、ご門の前に捨てられていた捨て子をお引き取りなさって、ご自分の子として育てるなんて、ご立派なことじゃありませんか？」

おろくは章吾から目を逸らすと、自分の盃を床に置き、襟を直しながら畏まった。

「……そなた、無礼を申すと」

章吾は片膝を立て、脇に置いていた刀をつかんだ。それを見て、おろくが目を上げた。

「おや、斬るとおっしゃるんですかい？ これだから武家は……」

おろくが苦笑した。

「嘘だとお思いなら、お家に帰って、ご家来でも誰にでも聞いてもらいなさいませよ。昔から居る人なら、皆知ってますよ」

章吾は絶句した。ここまで堂々と開き直られると、この女の言っていることが嘘に見えなくなってきた。

不安な気持ちに襲われて、章吾は刀を立てた。

ひっ、という女の悲鳴が背中であがった。

「どうした？ なにを揉めておる」

岡内が章吾の肩をつかんだ。

「なんでもない。向こうへ行つてろ」

「なんでもなくはないぞ。こんな所で、物騒ではないか」

「……すまぬ。ちよつと酔つたのだ」

「……そうか？ ならいいが……。とにかく刀は置け。女が怯えているではないか」

後ろを見ると、おいせが怯えた目をして、袖を口許にあてていた。板倉とおもんは酔つ払つてしまつていて、こちらに気づいていなかった。

おろくに振り返ると、おろくは顔を引きつらせ、胸に手をあてて、息を大きく喘がせていた。

章吾は膝を下ろし、刀を置いた。こめかみが熱かった。

「ろくとやら。今申したことは、本当のことなのか？」

抑えた怒りから、搾り出すような声になった。

ろくも小さな声で答えた。

「だから、本当でございますつて、さつきから言つてるじゃないですか。こんなこと嘘ついて、何になるつて言うんです？」

「そのほう、このことを、誰か他に話したか？」

ろくは口をへの字に曲げた。

「言つてませんよ。今日は思いがけず、元奉公していたお家のぼっちゃんに会つたから、つい出ちゃいましたけどね。ご心配なく。これからも言いませんよ。お侍は、怖うございますからね」

ろくは章吾の刀に目をあてて、首を竦めた。

章吾は「急な用事を思い出したので、悪いが先に帰る」と岡内に告げた。ならば、と岡内も帰ろうとしたが、板倉が泥酔状態にあつたので「介抱してやれ」と言い訳にして、章吾は一人店を出た。

章吾は考えのままとまらない頭を抱えて、夜の町を歩いていった。

五つを報せる鐘の、大きな音で我に返り、ここはどこだろう、と辺りを見回した。鐘の音の近さと付近の様子から、本石町の辺りだとわかった。章吾の頭に、平助の顔が浮かんだ。

平助は、昨年まで中間として有馬家で働いていた男である。歳で、足腰が弱くなったことから暇を願ひ出、今は本石町三丁目にある甥の家に隠居しているはずであった。

辞める時に、この辺りに足を向けることがあつたらせび立ち寄つて欲しい、と言われていた。甥の家は瀬戸物屋を営んでいるということだった。

平助は、章吾が物心ついた時には、既に屋敷内の奉公人長屋に住んでいた。ろくは由起について、古くからいる人間ならば皆知っている、と言つていた。現在屋敷にいる者に尋ねることは差し障りがあるが、平助ならばその点、うつつけに思えた。

実直で、誠実だった印象が残っている。

訪うには時刻が遅いことがよぎつたが、遊びに行くのではなく用があるのだから構うまい、と

思った。木戸番に尋ね、叶屋という表店を目指した。

平助は章吾を見て、曲がつっていた腰も伸びそうな勢いで喜び、座敷に通しながら、自分の近況を話した。店番をしているということで、すっかり店者言葉になつていた。

楽隠居というわけにはいかないと言いながらも、今の立場を楽しんでいる風なそぶりだったが、章吾が来訪の理由を切り出した途端、顔が強張り唇が震えた。知らないと言いつ張つたが、その狼狽ぶりがかえつて、言い張りが嘘だと教えていた。

章吾が、では父母に尋ねると言うので、平助はますます青ざめた。そして、あきらめたように溜息をつくと、渋々、な感じで話し出した。

「奥様には、おっしゃらない方が宜しいかと存じます。と言つて、私が申し上げたと、殿様にもおっしゃらないで下さいませよ」

「では、あの女が言ったことは本当なのか？」

「由起様が、奥様の実のお子様でないことは、残念ながら、本当のことでございます」
 章吾の、衝撃が走つた顔に、平助は慌てて言い足した。

「しかし、殿様のお子様であることには、間違いありません」

「それはつまり、父が他の女に産ませた子、というのだな？」

「はあ、さようで……」

平助が恐縮したように頭を下げた。

「では、なぜあの女は姉を、二親のわからない捨て子、と断じたのだ？」

「確かに、由起様は網籠に入れられて、早朝の御門前に、まるで捨てるように置かれておりました。しかし殿様は、ご実子であるとお認めになりました。ろくなる女が、二親がわからない、などと章吾様に申したのは、お屋敷を追い出された恨みからでしょう」

「追い出された？」

「はい。その女は、渡り中間だった亀吉の女房だと思ひます。殿様は由起様について、門前に置かれていたことを生涯口にしてはならない、と家臣一同にきつく口止めをなさいました。なのに、亀吉の女房は、屋敷内ではありませんが、話題にしておりました。そのことが殿様に知れて、亀吉共々、暇を出されたのでございます。その恨みから、そのような不埒なことを申したのでしよう。そういうわけで由起様は、奥様がお産みになつたお子様ではありませんが、章吾様の実の姉君様でいらつしやいますことには、お変わりございません。どうぞご安心なさいませ」

平助に笑顔が戻つた。その顔を見て、章吾も肩の力が抜けた。

翌朝章吾が目覚めると、障子向こうの陽の芯が、ずいぶん高い位置にあった。

慌あわてて起き上がり、寝ね巻きを着替かえると、自室じしつを出でた。

手水てすいに立たって顔を洗あらい、そこにあつた手拭てぬぐいを肩かたにひっかけた。そこから廊下ろうかを二つ曲まがった東ひがしの庭にわの木陰こかげで、由起ゆきがしゃがんで草取りくさとりをしていた。隣となりに、有馬家ありまけの奉公ほうこうを始はじめてまだ一年いちねんに満みたない、たみという小娘こむすめを連つれている。

章吾しょうごは二人ふたりに近づちかづいて行いった。たみはこちらに尻しりを向むけているが、由起ゆきは横顔よこがおが見みえた。草くさに向むかつて仰あやう々あやうしく眉まゆをひそめ、ずいぶんと集しゅう中ちゆうしている様ようである。

章吾しょうごは思おもわず笑えみがこぼれた。由起ゆきはどんなことにも真面目まじめ一途ひとすじに、一心不乱いっしんふらんに取り組くむのが癖くせだった。茶ちやの会かいで茶ちやを立てるのも、草取りくさとりにも同おなじ一生懸命いっしょうけんめいさで取り組くむその姿すがたがおかしくて、章吾しょうごはよくからかっている。章吾しょうごは廊下ろうかにしやがんだ。

「姉上あねうえ、またやっていますのですか」

声こゑをかけると弾はじかれたようにたみが立ち上あがり、「おはようございます」とたどたどしい言いい方かたで辞儀じぎをした。その後あとからゆつくりとした動作どうさで由起ゆきが立ち上あがり、手ての甲こうで額ひたいの汗あせをぬぐった。額ひたいに泥どろの筋すじがついた。

由起ゆきがこうして奉公人ほうこうにんの仕事しごとを手伝てつだう光景こうけいは見慣みなれたものであつた。父ちちや母ははが止とめても、一向いっこうに止やむ気配けはいがない。ほとんど口くちごたえしない由起ゆきであつたが、家事かじをするのを止とめられた時ときだけは、やらせて欲しいと反駁はんぱくした。「何か作業さぎようをして、体からだを動かうごかしているのが楽しいのです」と訴うえる。別べつに悪いことわるをしているわけではなし、本人ほんにんが楽たのしいと言いうのだから、と、この頃ころでは両親りやうしんもあきらめているようだった。

由起ゆきは高いところにある陽ひを指差ゆびさすと、額ひたいに泥どろをくつつけたまま、軽かるく小首こくびを傾かしげ、にっとう感じかんで、いたずらっぽく笑わらって言いった。

「おそよう」

たみが笑わらいをこらえる表情ひょうじようをした。ゆうべは誰だれのために遅おそくなったと思おもっているのだ、と思おもつて章吾しょうごは少しすこむっとした。

昨夜さくや屋敷やしきに着ついたのは、子ねの刻前こくまえだった。奥おくは、人ひとが起おきている気配けはいはなかった。章吾しょうごも床とこにっいたが、昨日きのうあつたいろいろなことが頭あたまを巡めぐって、寝返ねがえりばかり打うっていた。

やっと眠ねむりに落おちたのは、隣となりの屋敷やしきで飼かっている鶏にわとりの、時ときの声こゑがかすかに聞きこえた頃ころだった。由起ゆきは章吾しょうごのそばに駆かけ寄よると、耳みみに手てをあてて囁ささやいた。胸元むなもとが近づちかづいて、由起ゆきの匂におい袋ぶくろの香かおりが、気持きもちちよく章吾しょうごの鼻はなを撫なでた。

「大丈夫だいじょうぶ。今日きょうは父上ちちうえが非番ひばんですから、まだ御飯ごはんはありますよ」

「それはありがたい」と章吾しょうごは眉まゆを開ひらいてみせた。由起ゆきは章吾しょうごが不機嫌ふきげんになつたのを、空腹くうぷくのせいと勘違かんちがいしているのかもしれない。と。

父ちちの正伸まさのぶは日頃ひごろ、無遅刻むちこく無欠勤むけつじんを誇ほこる反動はんどうからか、非番ひばんの日ひは遅おそくまで寝ねている。勤めつとめのある日ひ

は家族揃って朝食をとらなければならず、寝坊をすると朝抜きにされるが、正伸も遅い非番の時は、寝過ごしでも朝食抜きを免れた。

由起が、大手柄をたてたように得意そうにしているので、章吾は人差し指を自分の額にあてた。
「姉上、(一)」

由起は、はつとしたような表情になって、手の平で額を触った。するとよけいに泥がついた。章吾は肩から手拭を外し、拭き取ってやろうとした。すると由起は「自分でします」と小さな声で言いつて、手拭を奪い取り、長い睫に縁取られた切れ長の目をしばたたかせながら、懸命に拭き始めた。

章吾はそんな姉を見て思わず、憐憫の情がわいた。姉だからしつかりしようと努めてはいるのだが、どこか間の抜けたところがある由起は、しつかりしようとすればするほど破れ目が出て、いつも章吾が助ける方に回った。

この姉が嫁に行くのか、と思うとやはり心配である。章吾は姉の気性を飲み込んでいるつもりだが、寅之助が、由起の端正な顔立ちとはちぐはぐな、この頼りなさを知っているかどうかはわからなかった。

賄いの女中に味噌汁を温めてもらって料理部屋で食べていると、母親の繁乃が入ってきて、無言で章吾の前に座った。

「おはようございます」

章吾は箸と茶碗を置き、頭を下げた。

「ずいぶんと、ゆつくりでしたね」

繁乃が挨拶抜きで言った。

「もうしわけございません」

母の細い目は、ひたと章吾に注がれていた。薄い唇が引き結ばれて、怒っているように見える。怒っていないなくても、元々が怒って見える顔をしていることを忘れて、章吾は軽く緊張した。

章吾は、神経の質が細かくて万事に厳格な、この母が少々苦手だった。章吾の側に座って、二杯目の飯をよそうため待機している女中も、たちまち固くなる気配が伝わった。

「こんなに遅く起きてきて、おかわりをするつもりですか。一杯で結構です」

繁乃は女中に櫃を下げさせた。章吾は去って行く櫃を恨めしげに見ながら尋ねた。

「父上は、朝食はお済みなのですか？」

「あたりまえです。今何時だと思っっているのですか？」

章吾は、険しい顔つきの母からは目を離して、味噌汁を啜った。啜りながら、こんな気詰まりな母だから、父は浮気をしたのだろうか、と思っただけだ。章吾が寝坊をしてさえこうだから、父の浮気を

知った時、母はどれほど怒り狂っただろうかと想像した。

それにしては、由起を可愛がつていることが不思議だった。章吾は子供の頃、母が姉よりも自分に厳しいように思つて、自分は母の本当の子ではないのではないかと疑つたことがあるほどである。

その疑念は、章吾が成長するに従つて消えてしまった。大人しく従順な姉が、母の神経に障らないのに比べ、腕白な弟は叱ることが多いから、その分、母は苛立つのだろう、と思つたようになつたからである。

が、姉が母の実子でなかったことを知つた今は、母の姉への愛情が、やはり不思議である。

「なにをぼんやりしているのですか。お食事中に行儀が悪い。さつさと食べておしまいなさい。食べ終わつたら、書齋へ行くのです。父上がお呼びですよ」

章吾は慌てて味噌汁を掻き込んだ。

書齋に向かうと、父は釣り道具の手入れ中であつた。

有馬正伸は釣りが趣味である。非番で天気の良い日はたいい出かける。晴れているのにこうして屋敷で道具をいじくっているのは、今日が、先祖の誰かの命日にあたっているはずであつた。繁乃が信心深く、そういった日は殺生を禁じている。

前回「どなたの、ですか？」と尋ねた章吾に、父は小首を傾げながら「確か曾叔母だと言つていた」と答えた。信心は立派だが、家系図全ての御先祖様の命日に釣りを禁じられるのは、章吾から見、父が少々気の毒だつた。

章吾は正伸の前に座つて、朝の挨拶をした。

「うむ。昨夜はずいぶんと、帰りが遅かつたそうだな。どこへ行つていたのだ？」

呼び出したのはそのことか、と章吾は思つた。

答えないでいると、正伸が軽く鼻を鳴らした。

「言えぬのか。まあよかろう。おまえももう十七じゃ。しかしな、子の刻を過ぎていたというではないか。日が変わるほど遅くなるのなら、事前に言つておくか、託を寄越すくらいの配慮をしろ。おまえが戻るまで寝ずの番の、家臣の苦勞がわからないではないだろう」

「もうしわけございませんでした」

「もうすぐ由起が嫁ぐ。もし今おまえが不行状をしたら、姉の縁組に関わつてくるのだぞ」

「はい」

章吾は畏まった。が、不行状と言われると、昨夜聞いた、父の妾話を思い出さないうけにはいかなかった。二人の間にどういふ事情があつたのか知らないが、子を門前に置いて行つたといふのだから、妾に対して父は、何やらまずいことをしたのかもしれない、と想像した。

「父上？」

章吾はそのことを突つてみたくなかった。偉そうに訓示を垂れる父の顔が、どう変わるか興味がないわいてきた。

「実は、昨日姉上のことで、私には思いがけないことを耳にしたのですが」

昨夜は、姉が母の子ではなかったことに衝撃を受けたが、一晩寝ると、ずいぶん薄れていた。例え半分でも、章吾にとつては血の繋がった、実の姉に変わりはないのだ。

「姉上は、母上の産んだ子ではないのですか？」

正伸は、虚を突かれたように、あつ、の形に口を開けた。章吾を見つめたまま、なかなか言葉が出なかったが、やがて「ううむ」と唸ると、竿を後ろに置き、立ち上がった。

廊下に出て周囲を見回し、その庭に誰もいないのを見届けると、障子を閉めて章吾の前に正座した。

「誰がそんなことを言った？」

「言えませぬ」

平助に名前を出さないと約束している。ろくという女のことも言いたくなかった。

「では、どんな風に聞いたのだ？ それは言えるであろう」

「姉上は、父上が外に設けた子で、赤子の時に、門前に捨て置かれていた、と聞きました」

章吾を見る正伸の目が、忌むような、冷たい色に変わった。父からこんな風に、不快極まりない、といった顔で見つめられるのは初めてだった。章吾に不安が兆した。この話題を、昔の父をからかう、そんな軽い気持ちで持ち出したことに、後悔が差ってきて、章吾は父から目を逸らした。

父と息子の間に、しばらく重苦しい沈黙が続いたが、やがて、正伸が思い切ったように口火を切った。

「このことは、言わないで済むものならば、わしと繁乃の、二人だけの秘密にしておきたかったが……。だが、こういうことがこれからもあるのなら、わしらが生きているうちに、おまえにも言うておいた方が良いでしょう。いいか、心して聞け。由起は、わしの子でもない」

今度は章吾が、あつ、と口を開ける番だった。

正伸は事情を話し始めた。

正伸と繁乃は、なかなか子供に恵まれなかった。夫婦になって八年後、正伸の末の弟を養子に迎えた。しかし養子は、迎えた五年後に亡くなった。再び養子を考え始めた矢先、思いがけず繁乃が、初めて子を身ごもった。

繁乃が身体大事になった時、正伸は、当時有馬家に奉公に来たばかりだった、久という名の女中に手をつけてしまった。すると間もなく、久も子を宿した。久は有馬家から出し、深川に囲った。

しかし久は、当時、深川・本所一带を襲った火事に巻き込まれて、腹の子諸共、亡くなってしまった。

火事からほどなくして繁乃は女の子を出産したが、その子は産まれた翌日に亡くなってしまった。

「繁乃は、我が子の死と、久とその子供の死を、繁乃自身に結びつけて考えてしまったのだ」

「どういふことですか？」

「繁乃の子が死んだ時、繁乃はこう申した。自分が産む子が女で、久の子が男ならば、有馬家の跡取りは、嫁して十三年経つ、正妻である自分の子ではなくて、やってきたばかりの奉公人の、久の子となる。それがどうしても許せなくて、久と、久の腹の子諸共、死んでしまえば良いのにと願った、とな。もちろん心底から願ったわけではなく、多分に、わしへの八つ当たりがあつたことはわかつている。わしはそれまでも、女の子のことで繁乃をずいぶんと苦しめてきたからの」

章吾は父に目を瞠った。正伸は視線を反らした。

「こんなことを息子に言うのもなんだが、夫婦になつてからしばらくの間、繁乃とわしはあまり気が合わなくてな。家で得られぬものを、つい外に求めてしまったのだ」

章吾は、それはわかるような気がした。

さばけた氣質の父と、些事にこだわり、陰に籠りがちな母とでは、馬が合いそうにない。また、奥祐筆という所は、幕府の機密に関わる内容を扱つていたので、父の仕事はかなり神経を遣うはずであつた。

仕事を離れて家に帰り、しかしそこでも気が安まらないとしたら、母には悪いが、父の気持ちがあるの女に向かつては仕方がない。

母は、八百石の腰物奉行の家から嫁入つてゐる。家格は有馬家よりずっと高いが、腰物奉行は全くの閑職である。それだから母は、夫の仕事の難しさに理解が行かなかつたのかもしれない、とこの時章吾は思った。

正伸は章吾に目を戻した。

「八つ当たりだつたはずの一時の思いが、繁乃の願いどおりになつてしまった。繁乃にしてみれば、それは恐ろしかったであろう。久の訃報を耳にした途端、たちまち産気づいてしまったからの。そして、早産だつた繁乃の子が亡くなつた時、繁乃は自身を責めた。他人の死を願つた自分に罰が下つたのだ、とな」

章吾は、普段の母の信心の深さから推して、母がどれほど苦しんだか容易に想像できた。こうした場合、信心の深さがかえつて仇になるようだと思つた。

「おまえもわかつてゐるように、繁乃は厳しいところがあるが、かと言つて、人の死を本気で願うような女ではない。身ごもると気が昂ぶると聞かすが、もう若くもなかつた繁乃が初めて子を孕ん

で、それは不安であつたらう。そこへ持つてきて、わしの浮気だ。気が病んだとしても無理はない。全てはわしが悪いのだ」

正伸は項垂れて、月代に手を置いた。章吾も目を伏せた。

「繁乃は寝込んでしまい、離縁してくれと申し出た。わしはその申し出を突っぱねた。気の合わぬ夫婦ではあつたが、繁乃をそこまで追い込んだのはわしだからの。これからは繁乃を大切にしようと思つたのだ。しかし、わしが詫びても、繁乃の枕はなかなか上がらなかつた。有馬の家は黒い雲がかつたように、暗く沈んでしまった。あの頃はわしらにとつて、まさに地獄だつた……。そんな時だ。由起が門前に捨てられていたのは」

章吾が目を上げると、正伸はまぶたを閉じていた。

「家臣らは繁乃をはばかり、そつとわしに教えた。だが、わしには覚えのない子だ。普通であつたら、捨て子は辻番へ持つて行け、と、赤子を見ることもなく放り出すところだが、その時わしは、赤子を見に行つた。やはり、亡くした子への未練が、そうさせたのだらうな。見ると、雪のように色の白い子だつた。亡くした我らの子も、色が白かつた。似ている、と思つたのだ。いや、思ひなかつたのかもしれない。だから、繁乃にも見せてやりたくなつた」

正伸は思ひ出をかみしめるような、しみじみとした口調のままに、まぶたを開いた。

「臥せていた繁乃のところへ赤子を連れて行くと、繁乃はわしの手から奪い取るようにしてな、腹をすかせて泣き始めたあの子に、自分の乳を含ませたのだ。するともう手放せなくなつた。それから毎日子の世話をするようになり、そうこうするうちに、繁乃はすっかり元氣になつた。元氣になると繁乃は、あの子は死んだ子の代わりに仏様が下さつたのだ、と言ひ出し、だから養女にした、とわしに訴えるようになった。なにせよ、元氣になつた繁乃を見るにつけ、繁乃にはあの子が必要なのだとわかつた。わかりはしたが、旗本の養女となれば届け出が要る。まさか身分のわからぬ捨て子とは言えまい。そこでわしは、架空の妾を作り上げ、実子として届け出たのだ」

「では、御公儀に偽りを？」

章吾は囁いた。

正伸はうなずいた。

「奥祐筆の仕事には、武家の縁組、家督相続、出生届の受理不受理、などの調査がある。わしの場合、自分で自分を調べるのだから、そこは役得、というわけだ。しかし、それでもわしにとつて決して、渡るに危なくない橋、だつたわけではない。このことが上に知れたら、わしはこうだから」

「の」

正伸は首に手刀をあてた。

章吾は、背中が汗ばむのを感じた。それは、父が障子を閉め切つて部屋が蒸してきたせい、だけではなかつた。

「事情が事情なだけに、乳母は頼まなかった。繁乃も奮闘したが、わしも手伝った。なにせ子育ては二人とも初めてだ。それは大変だった。しかしそうやって二人で力を合わせているとな、夫婦仲が以前よりずっと良くなったのだ。わしは他の女に走るのは止めて、もっぱら釣りに精を出すようになった。もうあんな思いは懲り懲りだからの」

二人の子と一人の女が死に、妻から離縁を切り出された一連の騒動は、父にとってもかなりの心の痛手だったのだ、と章吾は思った。

「そうして由起を拾った翌年、繁乃はおまえを身ごもった」

「そうでしたか……」

「あの時離縁しなくて良かった、由起のおかげだ、と、繁乃はおまえが産まれても、由起を厭うたりはしなかった。繁乃が由起を慈しむのは、繁乃にとつての一種の信仰、救いなのだ。そうしてもちろんわしも、二人を分け隔てなく慈しんできたつもりだ。おまえはこれまで一度も、由起がこの家の子でないなどと、疑ったことはなかったのである。それが証拠だ」

正伸は懐手をし、胸を張った。章吾は力強くうなずいて見せた。

「しかし、そのことを、武井は知っていますのですか？」

「いいや知らぬ。このことは今日おまえに話すまでは、夫婦二人だけの秘密だったのだ。しかし、昔のことがおまえの耳に入ったように、いつ武井にも同じことがあるかも知れぬ。例え門前に捨て置かれようが、由起が本当にわしの子ならば問題はない。また、わしの子でなくても、産みの親がわかっていて、それを養女に貰ったのであれば、これも問題ではない。問題なのは、由起が、誰の子なのかわからぬ、ということだ」

章吾の目の前に、物乞いの光景が浮かんだ。父がはつきりとは言わなくとも、誰の子かわからない、ということとは、そういう場合もあるのだ、と痛感した。

「ゆえに、格下に嫁がせる。不満は持つな」

降るようであった格上からの縁談を、両親が全て断って武井に決めた理由がわかった。

「……はい……」

これまで経験したことのない、どう表現したら良いのかわからないほどの哀しい気持ちだが、章吾の胸を塞いでゆく。

「そのことでもし、武井が由起を離縁するようなことがあったら、父と母がああ世に逝っていた場合でも、弟として姉をこの家に引き取ってやれ。ここは由起の実家だ」

「かしこまりました」

そんなことがあったら、全力で姉を守ってやる。そんなことがあったら、寅之助の手足の二、三本はへし折ってやらなければならぬ。章吾は握り拳に力を入れた。

頭に血が上ってきた章吾とは反対に、正伸は穏やかに言った。

「しかしのう、武井に嫁がせようと決めたのは、格下だから、という理由だけではないぞ。寅之助の父、武井善次郎は、元は八十石の賄組頭だったのが、京に自費留学を願ひ出るほどの研究熱心でのう。江戸に戻つてからは、習得した上方料理の腕を揮つて、上様の御歡喜を得、二百石の賄頭に出世した男だ。そして息子も料理好きと来ている。寅之助の手料理や菓子をおまえも食したのであらう」

寅之助は有馬家に足を運ぶたび、手ずからのものを持参していた。章吾など、台所に入るだけで母親から叱られるので、賄役の家風はずいぶん違うのだと思つていた。

「やつが出世するかどうかはわからんが、親の跡を継いでも、とにかく実直に勤め上げる人物、と見た。寅之助は時々わしの釣りの供をするが、顔はあのように鬼瓦でも、話していると、意外に気持ちの優しい男だと気づいた。由起には、懐の深い男でなければいかん」

うなずきながら、章吾の心に、ふと懸念が持ち上がった。

「姉上は、どこまでご自分のことを知つていられるのでしょうか？」

「由起は何も知らぬ。知らせまいとして、繁乃もわしもこれまで努めてきたのだ」

章吾は、ろくという女とその連れ合いを、正伸が屋敷から追い出した、という話を思い出した。

「だからそなたも知られぬよう、くれぐれも気をつけるのだぞ」

「わかりました」

「おまえに話したとは、繁乃には言わぬ。由起のことを、おまえがわし以外の者から聞かされたら知つたら、心配するからな。そうでなくとも繁乃は今、由起の婚札のことで気を詰めているのだ。どうだ？ これでおまえも、由起のことをおまえに吹き込んだ者のことを、わしに言う気になつただろう。有馬と武井の家のためだ。見過ごすわけにはいかぬ」

「どうなさるおつもりで？」

「場合によつては、密かに始末させる」

「その者には、私が話をつけます。姉上のことを二度と口にしないよう、約束させます」

「話か……。おまえも甘いの」

正伸が、苦々しげに言った。

章吾は父から顔を背けた。

章吾はうきよ屋に走つた。おろくを斬るつもりだった。父に穩便なことを言ったのは、始末をつけるのは自分の役目、と思つたからである。

店はまだ開いておらず、戸を叩くと、奥の暗闇から出てきたのは、昨夜岡内についたおいせだつた。

「おろくさんならこの店辞めて、今朝出て行きましたよ」

今まで寝ていたと見えて、陽差しが目に痛そうにした。

「辞めた？ どこへ行ったのだ」

「さあ、知りませんね。何も言いませんでしたよ。こっちも聞きやしませんよ。こういう商売ですからね」

昨夜のおいせは二十代半ばに見えたのだが、強い陽光に曝された素顔は、皺も染みもたるみも、四十は過ぎていると語っていた。寝不足なのだろう、目の下の隈もまぶたのむくみも目立つ。由起が赤子の時、既に所帯を持っていたのだから、おいせ同様おろくも、わずかな灯りと濃い化粧に隠されていた本当の顔は、これくらい惨めであろうと章吾は想像した。その想像は、章吾の決意をひるませた。

「住まいを知らぬか？」

「ここですよ。昨日まではね。あたしらみんな、ここで寝起きしてるんですよ」

「亭主がいるはずだが。名は亀吉と言う」

「あら、そうなんですか？ でも、おろくさんならここに三年もいたけど、ここより他に、どこかへ出かけたことなんてありませんでしたよ。死んだか別れたか、したんじゃないでしょうかね」

おいせは横を向き、口許を手で覆いながらあくびをした。

「本当なのだな？」

「なにがです？」

「おろくをかくまっているのではないだろうな」

おいせの顔が陰しくなった。

「お疑いなら、どうぞ踏み込んで家捜しなさいましな。まだお休みのお客さんもいるから、そのお刀をちらつかせて、起こしてあげて下さいまし。さぞかしぱっちり目が覚めるでしょうよ」

昨夜おいせは刀に怯えたはずだが、今日は平気な風で、章吾が腰に差しているのを見下ろしている。その冷えた感じにやや気圧されながら章吾は尋ねた。

「板倉と岡内は、ここにいるのか？」

「お二人とも、あれからすぐに帰りましたよ」

おいせは腕組みをすると、章吾を睨みつけた。おいせは、昨夜の章吾とおろくの諍いが、おろくが店を辞めた理由と関係している、と見当をつけている様子である。章吾は、これ以上ここにいても何も出て来ない、と見切りをつけた。

「手間をとらせた」

おいせに背を向けて、五間ほど歩いた。が、想起したことがあって振り返った。

おいせは板戸に身体をあずけてこちらを見ていた。章吾は駆けておいせの所に戻った。

「そこもとは、おろくが中間の女房で、かつて武家屋敷で奉公していた、ということを知ったこと

とがあつたか？」

「いいえ？ 初耳ですね。本当なんですか？」
おいせの目から敵意が消えて、入れ替わりに好奇の色が現れ出た。

うきよ屋を離れながら、章吾はおろくについて考えた。

昨夜おろくは、有馬家を出された後、由起のことを話したのは章吾が初めてだと言っていた。そのことは、三年もいた店の同僚に話していなかったことから、信じられると思う。

昨夜はたまたま思いがけない再会に（といっても二人ともわからなかったのだが）、去来するものがあつて、つい話してしまつたのかもしれない。章吾にその気はなかったが、おろくは章吾と寝なければならぬと思つていたはずである。するとその相手が、かつて自分を追い出した奉公先の家の子と知れば、我慢ならぬと思つたとしても不思議ではない。それが嫌で、章吾からの拒絶を引き出すために、わざとあの話を持ち出した、とも考えられなくもない。

またおろくは、武家は怖いからあの話は今後二度としない、とも言つた。実際怖かつたからこそ、慌てて姿を消したのである。

こう考えると、始末しなくても、おろくはこれからも口をつぐんでいるだろう、とそんな気がして来た。

このあたりで、章吾の上気した頭にも、ようやく冷静さが戻つて来た。すると、正伸がおろくの始末について「密かに」と言つたことや、「姉の嫁入り前だから、不行状をしないように」と忠告されたことがよみがえる。すると、冷や汗が出て来た。血気に走つて、軽率な行動をとるところだつた、と気がついた。

反省しながら、とぼとぼと帰り道を歩いていると、大きな構えの小間物屋に目が留まつた。

ふと、自室にある手文庫の中の金を思い出した。その金は先日、弟から姉への婚禮祝いを何か買いなさい、と母から渡されたものだった。こういう場合、小遣いを月決めしてくれていれば、自分の欲しい物を我慢しても、小遣いを貯めて、それで買つてやる事が出来る。同じく母の財布から出た金でもその方が、少しは姉のために努力や我慢をした部分が入つた金になる。しかし繁乃のやり方では、それが出来ないのが章吾は残念だった。

由起の祝言は三方月先であるが、ここで下見をしておこうと章吾は考えた。

暖簾をくぐると店内は混んでいた。店員の他には女客ばかりで、章吾は戸惑つた。

身の置き所がない心細さを抱きながら、懐手をして、女達の肩越しに、女達が手にとつてある品々を見て回つた。そうするうち、手の空いた若い男の店員が、揉み手しながら章吾に近寄つて来た。

「どのようなものをお探してしよう？」

まだ具体的に考えていなかったから、章吾は口ごもった。

「姉の、婚礼祝いの品なのだが……」

「それはおめでとうございます」

店員は愛想良く腰を折った。それから、頭を上げてはまだ困惑顔の章吾を見て、

「何かお品を出して参りましょうか？」

と助け舟を出した。章吾はうなづいた。

「ご予算はいかほどで……？」

母から渡された額をそのまま言う店員はにっこり笑って板の間に上がり、奥の壁一面に備えてある商品戸棚のあちこちの引き出しを開けて、中の物を手に持ってきた。

櫛、簪、笄、といったものが五点、上がり框に腰掛けている章吾の前に並んだ。

どれもきらびやかな物だったが、その中でも特に、章吾の目を引いた物があつた。それは、緋色の珠に鼈甲の串が貫く玉簪であつた。

思わず手にとると、店員が嬉しそうな声を出した。

「それをお選びとは、お目が高くていらつしやいます。これは昨日入荷したばかりでございます、ですからこれをお出したのは、お客様が初めてでございます。商品とおお客様が会合のもの、一つの縁でございますからね、はい。それにしてもお客様は二運が宜しくていらつしやる。これほど大きくて傷一つない珊瑚の珠は、そうそう出るものじゃありませんですよ」

「さんご、なのか」

「はい。もしこの機会をお逃しになつてしまわれたならば、すぐに売れてしまうに違いございません。なにせご婦人方は、このような美しい品には目がなくていらつしやいますれば……」

「ではこれを貰おう」

「それが、ちよつとばかり、ご予算を上回るのですが……」

店員がひどく済まなそうな顔をして見せた。

「いくらだ？」

「はい。このようなお値段です」

店員はそろばんを弾いて見せた。

「そんなにするのか？」

章吾は目をむいた。予算をかなり上回る品、とわかつて持つて来た店員のこの行為を、章吾は腹立たしく思う。が同時に、こういう所で働く店員の、その如才なさに感心もした。

「これでも精一杯、引かせていただいているのでございますよ。これだけの品でこのお値段とは、他のお店では出来ることではありませんでしょう。そもそもこれだけの品を仕入れることが出来る

かどうか……」

「わかった。わかったから、少し考えさせてくれ」

矢継ぎ早に言葉が飛び出すやりの店員を制し、章吾は腕組みをして、目を瞑って思索した。母から渡された金額をはるかに上回るが、それにしてもこの品は、姉に似合いそうである。

店員が、横からそつと話し掛けた。

「失礼ですがお武家様。今、ご用意が難しいようでしたら、お代は後からでも結構でございますよ」

「どういうことだ？」

「はい。この品の金子がご用意できるまで、どなたにもお売りせず、当店で預からせていただきますよ、ということでございます。もちろん、期限は決めさせていただきますが」

「いつまで待つてもらえるのだ？」

「一カ月は大丈夫でございます」

「一カ月か……。短い気がする。三カ月は駄目であろうか？」

「三カ月、でございますか……」

店員の顔が初めて曇った。

「少しお待ちいただけますでしょうか？ 番頭に話してみます」

店員は腰を浮かすと、帳場に座って書き物をしていた男に耳打ちした。男が顔を上げて章吾を見た。視線に一瞬、人物を値踏みするような色が現れたが、すぐに愛想の良い表情に代わり、章吾の所に来て座った。

「このたびは、当店の品をお気に召して下さいます、まことにありがとうございます」
「章吾とは親ほども年の離れた番頭が両手をついた。

「三カ月、ということを伺いましたが……」

「無理ならばいいのだ」

「宜しければご身分を、一筆頂戴できませんでしょうか」

「それは構わないが……。それによつては、待つてもらえるということか？」

「大変に失礼なことなのですが、そういうことでございます……」

章吾は紙に、父の名と役職名、自分がその子息であることを書いた。

それを見て番頭は満面の笑みになった。

「これはこれは。奥祐筆組頭様の御息様でいらっしゃるやいますとは、まことにご無礼を致しました。どうかお許し下さいませ。代金をご用意できますまでお待ちただかなかなくても、先にお品をお屋敷にお届けして、お代は後からでも結構でございますが……」

「いや、それでは困るのだ。受け取りにまいるほうが良い」
 「かしこまりました。それでは、お待ち申し上げております」
 「必ず、三カ月以内に持つてまいる」
 帰りの道中、章吾の頭の中には、手拭で頭を覆い、褌一枚になって石運びをする、自分の姿が描き出されていた。

岡内に口を利用してもらって、章吾は普請場の仕事を得た。
 塾と道場には、三カ月間の休みを願いだした。

日頃鍛錬を怠っていないつもりだったが、炎天の下の石運びは、思ったよりも重労働だった。特に、担ぐコツのつかめない、慣れない最初の頃は、肩が痛んで眠れないほどであった。

が、その日毎に金を渡してくれるので、手文庫に、目標とする額の金が貯まってゆくのが楽しい。仕事がついと音を上げそうになった時は、あの美しい玉簪を見て驚く姉の顔を想像した。すると、自然と口元に笑みが浮かび、また力がわいてきた。

毎日、仕事を終えると銭湯に寄り、そこで汗と泥を落とした後、屋敷に戻る。帰るとちようど夕食時で、食べ終えたとたちまち眠気が差し、そのまま床についた。

朝、弁当を持って塾に行き、昼、道場に行く、というそれまでの章吾の日常と、屋敷を出る時刻と帰る時刻が変わらなかったために、家族には知られずに済んだ。ただ、いつもの夏より肌焼け具合が尋常でないことを問われたことはあった。その時章吾は、道場の席次が上がって、今年の夏は後輩を教える立場になったために、外で稽古をつけている、と言いつい訳をした。

章吾の中では、それは丸きりの嘘というわけではなかった。なぜならば、実際この春に席次が上がった章吾は、もし道場を休んでいなかったら、夏には外で後輩に稽古をつけるはずだったからである。三カ月ずれるのだ、という感覚であった。

普請仕事を始めて二カ月半で、簪を買うのに必要な額が貯まった。

小間物屋へ品物を受け取りに行った日の夕食後、章吾は由起の部屋の前で片膝をついた。

「姉上、今よろしいでしょうか」

ほんの少しの間の後で「どうぞ」と中から声がした。

「失礼します」

障子を開けると、由起は縫い物を片寄せていた。夕食が終って寝るまでの間、裁縫をして過ごすのが由起の日常である。

「もうすぐ嫁に行かれるというのに、相変わらず縫い物ですか」
由起の前に座りながら言った。

「章吾さんはこのところ、毎日お出かけの上に、ご夕食後はすぐにお部屋に行かれますので、ご存知ないのかもしれませんが、お支度はすっかり整って、もうこれといってすることは何もありませんよ」

由起の婚礼道具が、屋敷の表向きの部屋二つ分を占めているらしかったが、章吾はそこを避けていた。由起がこの家からいなくなることを知らしめる、それらの品々を見るのは、愉快なことではなかった。

「それは、誰のものです？」
片寄せた絹物に、章吾は目を遣った。

「あなたの来年のお衣装ですよ。来年はお仕事に就かれますものね。お召し物も沢山ご入用になるでしょう？」

「まだ、来年の話ですよ」
章吾は苦笑した。

「けれども、もう、こうして縫ってさしあげることとも出来なくなりますから……」

由起が布を軽く撫でる。章吾はその白い手が、これからは寅之助の世話をするのだと思った。その想像は、章吾の胸を刺した。思わぬ痛みにも、目をつむった。

柔らかく、暖かなものが頬に触れて、章吾はまぶたを開けた。

「本当に、この夏はよう焼けて……」

由起の指先が、章吾の頬に触れているのであった。

これまでも由起はこうやって、気安く章吾に触れてきた。しかしそれは、姉が弟にするなげない仕草だから、これまで章吾は、肉親の情を感じるだけだった。

が、今日は違った。もっと熱い何かが動いている。心の臓が早く打つ。

夕食後から就寝までの時間は、姉の部屋で寛ぐ、といったこれまでの習慣を止めて、ただちに就寝するようになったのは、仕事で疲れているから、だけではなかった。由起のそばにいて、こうして息苦しくなるのが恐かった。

章吾は由起の手を振り払うと、照れ隠しの乱暴な動作で、自分の懐に手をつっ込んだ。ふくさで包んだものを取り出し、由起の前に置いた。

「なんですの？」

「お祝いの品でございます」

「まあ……」

「開けてみてください」

「でも……」

「遠慮は要りません。さあ」

焦れて章吾がふくさを解き、現れ出た桐の箱を由起の手に持たせた。

由起は慎重な手つきで蓋を開けた。

「これは……」

大きな瞳が更に大きくなった。

「お気に召しましたか？」

「このような、高価なもの……」

「姉上には、これまでずいぶんとお世話になりましたから」

「世話など……」

由起が戸惑ったような表情になった。

「ほれ、この小袖も縫っていたいただきました」

章吾は自分の両腕を広げて見せた。章吾の着ているものはほとんど由起の手製である。

「今も、来年のものを作って下さっております」

「そんなこと……。私はどういうことが好きだから……」

「その簪は、気に入りませんか？」

「いいえ、とつてもきれい」

由起はにっこりとした。

「では、どうぞお使いください。今、ここで挿してみただけませんか？」

由起は微笑んだままうなずくと、合わせ鏡にいざり寄った。

蓋を外し、鏡を覗き込みながら、それまで挿していた、地味な銀簪を抜いた。

代わりに、新しい簪を挿してゆく。

鼈甲の串の半分が、艶やかな黒髪に埋もれて、白く輝くうなじに、紅い花が咲いた。

(なんと美しい首筋なのか……)

章吾は見とれた。動悸がますます早くなった。

頬を上気させた由起が、くるりと章吾に向き直った。

「どう?」

「とても、お似合いです」

感に堪えてしまった章吾は、声の上擦った。

由起がはにかんで笑った。その笑顔に吸い寄せられるように、章吾は由起にいざり寄った。

由起の笑顔が消えた。由起の一步手前で、章吾はかろうじて抑制をきかせた。

「姉上。姉上はこのたびのお話を、どう思われているのですか?」

「由起の声はかすれていた。喉が渴いて仕方がない。」

「どうして？」

由起が身体を固くするのがわかった。

「ご快諾なさっているのでしょうか？」

由起は、そのことか、というふうに緊張を解いた。

「寅之助様は、良いお方とお見受け致します。それに、父上と母上がお決めたことですから、私がどうこう言うことはございません」

由起に笑みが戻る。その穏やかな笑顔を見ると、章吾は苛立つてきた。

「確かに我らは、親の決めた相手と縁付かなければなりません。それでも、もし姉上が、この縁組にご不満がありますなら、私は父上や母上にかけてあつてみます」

章吾は、——真実を告げたい——、という誘惑に、からみとられそうになった。

——そなたと私とは血が繋がっていない。

心がそう叫ぶ。

——添おうと思えば、添える間柄なのだ。

「章吾さん？」

顔をうつむけた章吾の、膝頭を驚ぶかみにした両手が、力をこめる余り震えているのを見て、由起は心配顔になった。

「どうかしたのですか？」

「……なんでもございません。失礼します」

章吾は由起の顔を見ないままに立ち上がると、部屋を出た。

廊下を大股に歩き、三つ角を曲がった所で、腰を降ろした。

柱にもたれ、夜の庭の、どこでもない一点に目を凝らした。暗闇のあちこちで、秋の虫がさん

ざめいている。夏の盛りを過ぎた涼気に浸かっていると、獣じみた気持ちい静まってきた。

（言っただうする）

章吾は自分に問い掛けた。章吾は、由起が本当の姉ではなかったことを知ってから、由起を一人の女として意識し始めたが、真実を知らされた由起が、果たして章吾を、一人の男として見てくれるかどうかはわからなかった。

由起が章吾を弟としてしか思えないとしたら、章吾の告白は、身元のわからない捨て子、という忌まわしい事実だけを、由起に残す結果にしかない。

（しかし、もし受け入れてくれたとしたら……）

先ほどの、由起の指の感触が頬に残っていた。章吾の頭に、由起と二人、手に手をとって駆け落ちする姿が描かれる。それは、章吾に甘い酩酊感をもたらした。

一時、その放恣な想像に身を任せていたが、やがてその先に、父の顔、母の顔、家臣達の顔が浮かんでくると、入れ代わるように酔いは去って行った。

(言つてはならない)

章吾は自分に言い聞かせた。ご公儀には、由起は有馬家の実子として届け出ている。ご公儀を謀っていたことが知れば、有馬の家は罰せられる。最悪の場合、父や母や家臣達といった、章吾にとつてやはり大切な多くの人間が、路頭に迷うことになる。

章吾は両腕で、自らの身体を強く抱きしめた。

引き裂かれるような、身を切られるような思いに、そうやって耐えた。

もう金を稼ぐ必要はなかったが、章吾は普請仕事を続けた。由起の輿入れまで、出来る限り身体を動かしていたかった。しかし日中どんなに身体を酷使しても、夜になると由起への想いが溢れ出て、眠れない夜が続いた。

眠れないまま、食事の進まないままに、婚礼の日がやってきた。

章吾は青い顔をして正装をし、同じく襟を正している父や母とともに、座敷で待った。

白無垢姿の由起が、女中に手を引かれて入ってきた。

由起は父と母に、別れの挨拶をすると、章吾の前にも三つ指をついた。

「章吾殿。長い間、お世話になりました。どうぞお元気で」

眉を剃り落とし、鉄漿をした由起は、昨日までとは別人のように見えた。

章吾を優しく包み込むようにして見る、深いまなざしだけが、そのまま、懐かしい人だった。

「父上様と母上様を、お頼み申します」

「かしこまりました。ごさいます。姉上様も、どうぞお元気で」

こう言葉を発して初めて章吾は、簪を渡した夜から今日まで、由起と会話をしなかったことに気がついた。

今日は綿帽子で見えないが、昨日まで由起は、章吾の送った紅い玉簪を挿していた。由起は変わらぬ笑顔で章吾を見たが、章吾はそれには応えられなかった。苦渋の表情で、由起から目をそむけた。そういう態度に、由起が顔を曇らせても、どうしようもなかった。

夕暮れの玄関で、章吾は両親とともに、由起の乗った輿を見送った。

見送った後正装を脱ぎ捨てると、章吾は剣道着と竹刀を持ち、道場へ走った。明日から稽古を再開すると道場主に告げていたが、明日まで待てなかった。

道場に着くと、その日の稽古は終わりかけで、皆疲れていた。それでも章吾は、誰彼構わず稽古相手を捕まえては激しく打ち込み、その激しさに尋常でないものを感じた師範代が、思わず止めに入ったほどであった。しかし、師範代の言葉は章吾の耳に届かず、頬を張られて我に帰った。

道場の帰り道、章吾は板倉と岡内を、いつもの居酒屋へ誘った。二人は黙ってついてきた。飲んでも正体を忘れるほどに酔ったことのなかった章吾が、この日初めて荒れた。

「お前、泣いてるのか？」

板倉が、驚いた様子で章吾の顔を覗き込もうとする。

「うるさいっ。泣いてなんかいない」

板倉を片手で払い、もう片方の手で顔を隠したものの、章吾は涙が止まらなかった。

そして、嗚咽で詰まる声を、搾り出した。

「俺を、どこでもいい。どこでもいいから、どこか、女のいる所へ、連れて行ってくれ」

二十五年後、有馬家の菩提寺である永徳寺の墓に、章吾は、母・繁乃の納骨をした。父・正伸はその十年前に、既にこの墓の住人になっていた。

納骨の後、章吾は院主庵に招かれた。

今年で齢八十になるといいうこの寺の主は、座るとますます小さくなって、まるで法衣の中に埋もれているように見えた。

茶を啜りながら、院主がぼつりと言った。

「ご葬儀に、お由起殿の姿が見えなんだようだが……」

「姉は、昨年末、急な病で、みまかりましてございます」

院主が目を見張って、亀のように襟から首を突き出した。

「なんと……。それは知らなんだ……」

「正願寺の、武井家の墓に眠っております」

「そうか……。由起殿は、亡くなられましたか……」

院主は首を引っ込めると、目をつむり、合掌した。口の中でしばらく念仏を唱えた後、合掌を解いて、夥しい皺の寄ったまぶたを開いた。

「由起殿には、大勢お子がおられたの。お屋敷での仕事でお見かけするたび、連れて来られるお子が増えてござった」

「はい、六人でございます。今年の春に義兄が隠居して、跡を、長子の作太郎が継ぎましてござい
ます」

武井寅之助は父親の跡を襲って、頭となった。職務をまっとうしていたが、由起が他界すると、食べ物の味がわからなくなった、と言って引退を願い出た。その時、家督も息子に譲った。息子の作太郎は今、賄調役に就いている。

章吾は、由起が嫁に行つてから八年後に、両親のすすめるままの結婚をした。

由起が次々と子を儲ける間に、章吾も二人の子持ちになった。

由起が嫁入る際、他家に嫁いでうまくやっていけるかどうか、章吾は心配したのだが、両親に請われて、産まれた子を実家に見せにくるたび、由起は福々しく太つて、幸せそうであつた。寅之助を手伝い、新しい料理の開発に精を出している、と笑つていた。

家禄が実家の半分の家で、子沢山な上に、夫の仕事の手伝いまでするとは、生活は楽ではなかつたはずだが、多忙は由起の性分に合っているらしかつた。子が増えることに貫禄が出てきて、娘時代の頼りなげな風情は薄れていつた。遅くなつて丈夫そうに見えたが、風邪をこじらせ、そのまま帰らぬ人となつてしまつた。

「そうか……。由起殿は、亡くなられてしもうたか……」

院主は、丸い背をさらに丸めて、放心したような面持ちで、庭に目を転じた。

開け放した障子の向こうの庭は、黄色味を帯びた陽光が、敷き詰められた玉砂利に跳ねていた。陽の色が柔らかいのは、一日の陽盛りが過ぎたことを告げているだけではなく、秋が夏を追い出し始めていることを報せていた。

この庭は、章吾にとつて懐かしい場所だつた。子供の頃、両親に連れられて先祖の墓参りに来るたび、院主と世間話をする両親から離れて、ここで由起と遊んだ。

有馬家と、そうした長い付き合ひのあるこの院主に、章吾はふと、由起のことを尋ねてみたくなつた。

「院主様は、姉が、有馬家の実子ではなかつたことを、ご存知でらっしゃいましたか？」

章吾に戻つた顔は、不思議そうであつた。

「ご実子でないとな？ はて、これは異なことを承る。由起殿は、正伸殿がお妾に産ませたお子であろう？ 拙僧はそなたの亡きご両親から、そう伺つており申したが……」

困惑顔の院主に、章吾は事情を話した。両親が亡くなつて、有馬家が罪に問われる恐れも消滅していた。

真実の話に院主は驚き、聞き終わると、独り言のようにつぶやいた。

「では、由起殿の申されていたことこそが、本当のことであつたのか……」

この言葉を聞いて、今度は章吾が困惑する番だつた。

「姉が？」

章吾は、わけがわからない、といった思いで院主に問い掛けた。

「姉が、一体なにを、どのように申したのです？」

胸騒ぎがしてきて、思わず声が大きくなつてしまつた。

章吾の勢いに気圧されるように、院主は目を瞬いた。

「自分は赤子の時、有馬家の門前に捨てられていた子で、有馬家の本当の子供ではない、と申されたのじゃ」

章吾は瞬間、頭を殴られた時のように、目の前がぼうつとした。うつむけた額に手をあてる。

「それは、それはいつのことですか？」

問いながら、章吾は慌しく記憶を探ってみる。しかし章吾には、由起が事実を知っていた、という気配を、由起から受けた記憶はなかった。

「あれは……」

院主も懸命に、昔の記憶を手繰り寄せている。

章吾はすがりつくような思いで、そんな院主の顔に見入った。

「そうじゃ。思い出したぞ。あれは確か、拙僧がこの寺の院主になったばかりの頃じゃった」

「それは、いつのことですか？」

「今から三十四・五年前のことです」

「三十四・五年前……」

章吾は呆気にとられた。

「三十四・五年前と言くと、姉は十歳ではありませぬか。間違いはございませんか？」

「最近のことは忘れてしまいが、昔のことは覚えておるゆえ、間違いござらぬ。そうか……。あの時由起殿は、まだ十でござったか……。時に大人びた表情をする子供だったゆえ、もつと大きく思うっており申した……。あの時由起殿は従者も連れず、こっそりお屋敷を抜けて参られた様子でござった」

章吾は絶句した。由起がそんなにも早くから知っていた、ということに衝撃を受けた。

「由起殿は正伸殿のお妾の子、とご両親から伺った時、ご両親は同時に、しかし繁乃殿が実の母親だと信じさせて育てたい、とも申された。ゆえに奉公人等にも固く口止めした、とな」

（そう。確かに両親は、奉公人達に口止めをした。そしてそれに反した者を、連れ合い共々屋敷から追放したことさえあった……）

章吾はおろくという女を思い出した。

おろくが屋敷に居たのは、章吾が生まれたばかり、と言っていた。するとその頃の由起も、まだほんの幼児である。ということは、おろくのような者が、その後にもまだ続いた、ということになる。

「両親が口止めたのに、一体誰が、姉に告げたのでしよう？」

「わからぬ。『誰がそんなでたらめを申したのじゃ？』と尋ねた拙僧に、由起殿は小さな頭を振って、どうしても答えようとはせなんだ」

（子供に対して、なんとという酷いことを……）

章吾は怒りに体が震えた。

存在を認めない雰囲気のある中で、他にどこにも行き場のない一人の子供が、悪意におびえ、孤独に耐えてきたことが、今わかった。

由起の苦悩を、両親も、自分も気づいてやれなかったことが、悔やまれる。

「由起殿は拙僧にこう訴えた。子を捨てるくらいだから、本当の親は、よほど窮乏していたのであろう。すると、もうこの世にはいないかもしれない。それでも自分は墓参りも出来ない。もしそうなら、自分はなんとという親不孝者だろう。今自分は何不自由なく暮らしているが、そうであるからこそ、本当の親の安否が気になる。どうか本当の両親の無事を祈って欲しい、とな」

章吾は、由起が物乞いに遭うと、施しをしないではいられなかったことを思い起こした。

あの頃は、どうして由起がそこまで彼らに共感するのか、同じ気持ちにはなれなかった章吾は不思議だった。が、今、あの頃の由起の行動に、説明がついたように思った。

それにしても、わずか十歳の子供が、自分を捨てた親を気遣うことに、章吾は少し違和感を覚える。

しかし、由起に告げた者が、(捨て子のくせに、旗本の息女などとは許せない。自分を思い知らせてやりたい)との意志を持った言い方をすれば、由起は自分の存在に罪悪感を持ち、際限なく周囲を気遣ってしまうような人間になってしまふのではないだろうか、と章吾は想像した。

「しかし拙僧は、そなたは有馬のご両親から生まれた娘御じゃ、と言つて、由起殿の訴えを取り合わなかった。由起殿を帰す際には『そんな馬鹿げたことは、拙僧は聞かなかつたことにするから、由起殿もご両親には言つてはならぬぞ』と、言い含めまでしてしまつた。

あの時は、繁乃殿のお腹ではないが、それでも正仲殿のお子、という安心感と、やはり、子供の言うこと、と思つて、深くは考えなかつたのだ。しかし、子供の言うことだからこそ真実、ということもある。大人には言えないことでも、弱い子供になら平気で言える、そういう者が実際にあったのだから。いや、これは、由起殿に悪いことをしてしまつた」

院主は首を垂れ、禿げた頭を撫で回した。

「……」

子供だから、大人に比べて、より傷つき易いのだ、と、由起の訴えを受け流した院主を、章吾は苦々しい思いで見た。

しかし、坊主に説教しても仕方がない、と気持ちを切り替える。

「いいえ、それで良かったのだと思ひます。姉は知っていた、ということ両親が知つたら、いろいろと面倒なことが起きたことでしょう」

考えてみれば、由起の苦しみに気づいたからといって、どうなったものでもなかつたのだ、と章吾は思った。

「由起殿はそのことを、ご両親にもそなたにも、誰にも話さなかつたのであろう？」
章吾はうなずいた。

「言うど、皆が困ると思つたのであろうな。そういう娘御でござつた。……あの時も、そうであつた……」

院主が視線を下げ、感慨深げにつぶやく。

「あの時、とは？」

章吾が聞きとがめると、

「いや、なんでもござらん。なんでも」

院主は、これは失言をした、という顔になつて、手を左右に振つた。

「なんでございます。教えて下さい」

章吾は一步膝を進めた。院主は唇をもごもごと動かした。

「しかし、これは誰にも他言して下さるな、とあの時由起殿に言われたことでの。いかんいかん。拙僧も年をとつた」

「言いかけておいて引つ込められますと、気になります。姉は、他にも悩み事を抱えていたのでしようか？ 弟として、知りとうございます」

院主はしばし考え込むと、観念したように、小さく溜息を吐いた。

「それもそうじゃな。由起殿とそなたは、たいへんに仲の良いご姉弟であつた。大恩あるご両親には憚られても、遠慮のない弟御になれば、言えるのであれば、聞いてもらいたかつたやもしれぬ」

院主は一口茶をすすると、言葉を選ぶようにして言った。

「そなた、縁切り供養、というものを、ご存じかの？」

「いいえ」

初めて耳にする言葉だつた。

「断ち難い、男女の想いを断ち切るために、相手と関わりのある品を、寺で焼いて供養をすることじゃ。由起殿はお興入れの前日、それをしに、この寺を訪れた」

耳を疑う表情になつた章吾に、院主はうなずいて見せた。

「そうじゃ。由起殿には、好いたお方がござつたのじゃ。誰かは知らぬが、身分のあるお方ではないかと推測致した。お相手から頂いた、と納めに参つた品が、非常に高価な材質の、簪であつたからの」

「……。その簪には……」

章吾は、声の上擦りそうになるのを、押さえ押さえ言った。

里帰りの度、章吾は、由起の鬘に、自分が送つた簪を探した。しかし、一度も見たことがなかつた。それを残念に思い、尋ねてみたかつたが、かつてのように、二人きりになれる時がなく、最後

まで聞けなかった。娘時代と嫁した者とは、鬻の形や衣装も変わってしまふから、あの玉簪は、嫁入り後の由起には、華美に過ぎたのかもしれない。たぶん鏡台の片隅にでも、しまわれてあるのだろう、と自らを納得させたものである。

しかし今、院主の話を聞いて、もしかしたら、という気持ちで章吾に生じた。

「どの様な細工が施してあったのか、覚えてらっしゃいませんでしよつか」

「よう覚えており申す。拙僧が火にくべようとする時、小坊主が『ああ、もつたいない』と申した程の品であったゆえにの。もちろんその小坊主には、修行が足りぬ、と叱りつけてやり申した。大きな紅珊瑚の珠に鼈甲の串が貫いた、それはみごとな玉簪であった」

章吾は思わず顔を伏せ、堅くまぶたを閉じた。

その簪を買うため、丸裸になつて働いた、若き日の、――あの夏――。

炎天の陽差しは、じりじりと肌を焼き、石を運ぶ綱は、肩に食い込んだ。

暑かつた。重かつた。痛かつた。

でも、充実していた。愛する者のために、汗して働く喜びを知つた。

内から、たぎり上げてくる情熱、に突き動かされて、精一杯に生きていた。

その熱情を、打ち明けたくて、堪え、打ち明けたくて、堪え、歯をくいしばつた。

後にも先にも、あんなに激しい時間を過ごしたことはなかつた、と章吾は思う。

由起が嫁に行つた後、章吾は小姓組見習いになつた。その間に妻を娶り、小姓組に登つた。

そのうちに、正伸が隠居したので跡を襲つて、今は奥祐筆組頭となつてゐる。

どの勤めの時もそれなりに、忙しかったり難しかったりしたことはあつたが、それでも、あの夏に比べれば、総じて穏やかだつた、と思える。

自分だけ、と思つていた激しいもの想いが、由起の中にもあつたことを、今、章吾は初めて知つた。その激情の時が、由起にとつて、どのくらいの期間あつたかはわからない。

しかし、章吾とは血が繋がっていないことを、もつともつと早くから知つていた由起の方が、――長くて、そして、――深かつた。そんな気がした。

院主の庵室を辞去して章吾は、呆然とした思いで玄關に出た。

そこに控えていた供侍に、もう一度墓参するので、そのままそこで待つてゐるよう命じた。

しかし墓には向かわずに、墓地の一遇にある四阿に行つて、腰を下ろした。

先ほど院主から聞いた話は、父母の墓に報告できるわけもない。昂ぶつた気持ちを静めるために、とにかく一人になりたかつた。

目を瞑った章吾に、由起との様々な思い出が甦ってくる。

幼い頃、しばしば章吾は、子供らしいやんちゃ心から、由起に腕力で向かって行った。年上だから、取っ組み合いの相手になって欲しいのに、由起は全く抵抗せず、されるままになった。それがじれったくて、叩いたり蹴ったりした。

そんな場面を親に見られると、ひどく叱られた。叱られて章吾は、武家の娘のくせに、姉は弱虫だ、と軽蔑した。

ある時二人で道を歩いていると、大八車に轢かれた猫が死んでいるのを見つけた。

章吾は気持ちが悪いと思い、目をそむけた。怖くさえあった。

しかし、由起はその猫に駆け寄って、手拭に包み、野原に連れて行って、墓を掘った。

章吾に痛めつけられても泣いたことのなかった由起が、猫を埋めながら「かわいそうに……。痛かったでしょう」と泣いていた。

この時章吾は、自分自身が恥ずかしくなった。弱虫なのは自分の方だと感じた。この時から、姉を軽蔑するのを止めた。

そしていつしか章吾は、こういう気性の姉を、庇って、守るようになっていた。

そんな章吾の気持ちに応えるように、由起が初めて本格的な小袖を縫い上げたのは、章吾のものだった。目が揃ってなかったが、その不器用さに、かえって温かみがあった。

食事も、由起は初めて作ったものは、なんでも一番先に章吾に食べさせた。毒見役だ、と章吾はよく冗談を言ったものである。

が、由起がそうしたのは、自分の喜ぶ顔が見たかったからだ、と今の章吾はよくわかる。なぜならその気持ちは、由起に喜んでもらいたいがために、簪を求めた自分と同じ、と思うからだ。

(打ち明けていれば、どうなったであろう……)

章吾は想像した。

すると、章吾の記憶の温もりの場所にある、嫁に行つてからの、由起の幸せそうだった笑顔が消えた。

(これで良かったのだ)

章吾ははつきりと思つた。

二人が一緒になるといふことは、父母を、家臣達の暮らしを、全て奈落の底に突き落とす、ということであつた。

そうしておいて、幸せに生きられる章吾でも由起でもなかった。

それでも章吾は今、閉じたまぶたから、涙が溢れ出そうになった。

物音がして、章吾は慌てて指で拭つた。

見ると、いつの間に来たのか寺男が一人、少し離れた所で掃き掃除をしている。

(そろそろ屋敷に戻らねば)

章吾は立ち上がった。西の空が燃え始めている。

寺の玄関へと歩きながら章吾は、自室の押入に大切にしまっている、由起の手縫いの小袖の数々を思い出した。若い時のものだから、今の章吾には、柄が、年甲斐もない。虫干しのたび妻にそう言われるが、かといって、妻が勧めるように、息子達にはやりたくなかった。

時々こっそり取り出しては、家族のいない時に、眺めたり、身にまもったりしていたが、どうやら自分もそれらを、縁切り供養、に出した方が良いのかもしれない、と章吾は思った。

(完)